

都庁で昼食を

松浦 純子

五月末に、何となく都庁の職員食堂のことが気になり、大江戸線を乗りこなせていない夫を誘って都庁に出かけた。「都庁の食堂に行ったら、学校の職員食堂と同じ業者が入っていた」とがっかりしていた先生のことばも頭をよぎったが、税金もきちんと払っているからと思ひ直し、出かけた。

都庁に仕事で出かけたことは何度かある。最後に行ったのはもう六〇七年前の事。「身の丈」発言の言葉で突如中止になってしまった英語の得点登録の説明会だったか、それ以外の大学入試の変更点だったか忘れてしまったが、都庁で説明会があった。空港の手荷物検査みたいなチェックを通して建物に入った。どこかの元首が日本にきている時期だったので、多分嚴重だったのだろう。

今回は、コンピュータにペンで名前と電話番号を登録する。手書きの文字がちまち活字になって画面上に現われる。他に来庁の目的など二つ三つの質問に答えると登録が完了する。目的の欄に「職員食堂」があるということは結構来る人がいるんだとホッとす。QRコードが印刷されたレシートみたいな紙を持って受付で見せると、名札を渡され、それをゲートでSUICAの要領でピッと鳴らして入る。荷物検査はなかった。

エレベータでいざ三十二階の職員食堂へ。メニューは抜かりなく自宅で調べていたので、注文する料理は決まっていたが、どうやって注文するのかが次の関門。ここでもコンピュータで入力。和食を選んで現金を投入すると、今度は電車の切符みたいなのが出てきた。それを持って和食、麺類などジャンルごとに分かれている配膳台に並ぶ。

無事に食事を手に入れたら、数種類の中から好みのお茶を選ぶ。さて、最後の関門。どこか空いている座席はあるか。きよろきよろ見回して二席空いているところへ。時計を見ると12時35分。一番混んでいる時間だったと思ひながら、周りの職員の話に耳をそばだてて食事を始めた。因みに都庁の食堂は学校とは別の業者になっていた。